

アイデンティティ問題、人間関係問題と現代日本の若者の生きづらさ ——人気ボーカロイドプロデューサー・ハチと wowaka の考察を中心として——

Pham Quynh Lien

はじめに

「生きづらさ」というのは、現代の日本社会では、誰にとっても聞きなれた言葉であろう。「生きづらさ」の語源は形容詞の「生きづらい」であり、「生きることを続けるのに困難を感じる」という状況を表す言葉である。藤川奈月によると、2000年代後半に「生きづらさ」という用語の出現頻度が著しく上がり、それ以降も伸び続けている（藤川 2021:361）。つまり、「生きづらさ」は、この時代、個人の日常において最も注目されている課題の一つなのである。

「生きづらさ」が一般的になった現代には、誰でもその犠牲になる可能性があるが、最もその悪影響を受けやすいのはこの時代に生まれ、生きづらさとともに育ってきた若者たちだと考えられる。その理由として、厚生労働省の調査によると、近年、自殺者総数が減少傾向にあるのに、十代の若者の自殺数が増加傾向にある（厚生労働省 2023:5）という点が挙げられる。このような現状から、増加する現代の若者自殺の問題はより深刻だと言える。

現代の若者の生きづらさについては、これまで様々な研究がなされてきた。それらの研究を検証することで、現代の若者の生きづらさは、アイデンティティ問題及び人間関係問題と密接に関係しているということが浮かび上がった。本稿では、まず、先行研究の分析によって、その関係について詳しく論じたい。

また、若者問題を解決するには、若者はどのような生きづらさを感じているのか、その原因とされるものはどのようなものなのかなど「生きづらさ」についての若者の意識を検討する必要がある。そこで、「ハチ」と「wowaka」という二人の大人気ボーカロイドプロデューサー¹の作品に着目して、若者自身が見せた生きづらさの表現を明らかにする。さらに、先行研究の検証結果を踏まえて、それらの表現がどのような意味を持っているのかを考察する。

¹ ボーカロイド音楽の作詞作曲者のことを示す用語。ボカロPともいう。

1. 先行研究から見た若者のアイデンティティ問題及び人間関係問題と生きづらさとの関係

若者の生きづらさといえば、貧困、障害など多くの問題とのかかわりがある。それらの問題は、古来存在するものである。しかし、現代の日本においては、生まれ育った環境に関わらず、若者に特有の共通した生きづらさがあると考えられる。実際に、困窮の状況にいる若者だけではなく、恵まれた環境で育ってきた若者でも、生きづらさを負う者は少なくない。

例えば、取材した大学生の生きづらさについて、杉山は、「受験に勝ち抜き、未来に希望があると考えられている人たちもまた、一割程度が、強く死にたいという思いを抱えるということになる」（杉山 2019：35）と述べている。本稿では、生まれ育った後天的な環境ではなく、時代の状況に沿った、現代の若者に共通の生きづらさを明らかにしたい。よって、本稿で若者の「生きづらさ」として扱う対象は、このような共通の生きづらさに特定される。そのため、本稿にとっての先行研究は、若者という特定の年齢層にある人達を一つの同じ属性を持つグループとして語り、そのグループに特有の生きづらさがあるということに注目し、現代若者の共通の生きづらさについて分析を試みた研究であるということをお断っておきたい。

先行研究において、最もよく言及される若者の生きづらさの原因は、人間関係における困難と、アイデンティティにおける困難である。

まず、大倉論文及び高石論文は同様に若者のアイデンティティ問題を中心として若者の生きづらさを検討している。大倉は、エリクソンの青年期の中心テーマとしてのアイデンティティ論の解釈を通して、青年期における葛藤などはすべて「自分とはなにか」という問いから説明できると主張している（大倉 2023：17）。

また、高石も若者にとって、「ひとまとまりの統合された「自己」を確立することは必然ではなくなってしまう」（高石 2023：28）と現代の若者のアイデンティティ不安定という問題に懸念を表した。

それに対し、石垣論文及び山下論文は、現代若者に関わる諸問題が人間関係の問題に根源があると述べている。

学業不振、非行・犯罪といった、環境や社会システムが影響する問題も、発生頻度や程度の差こそあれ、近代資本主義の確立後は、若者の生きづらさと常に関係している。養育者や年長者からのいびつな評価、それに基づく居場所の喪失、および再獲得における問題ととらえることもできる。ただし、居場所とは、物理的にも心理的にも、他者との関係において形成されるものであるから、結局は関係性の問題に帰着するかも

しれない。（石垣 2023 : 3-4）

若者の生きづらさとは、（中略）人間関係に拘束されていること、自分が人生の主体であるという感覚を持ちにくい状況などに特徴づけられる。（山下 2020 : 143）

ほかに、渡邊論文にも同様な論点が見られる。具体的には、大学生を想定した若者たちの生きづらさの原因としてあげられた三点のうち、「(3) 現在の生活に対する不安全感と大きな変化によるダメージから、明るい将来像が描けないこと」をのぞく二点、「(1) 基本的な信頼関係を土台とした『居場所』の喪失」及び「(2) 新しい人間関係（社会生活）に向けた主体的な試行錯誤が難しいこと」は人間関係に起因した問題である（渡邊 2023 : 157）。

就職の場においても、若者たちの人間関係への不安が見える。具体的にいうと、松原・津富及び松本は、就職の年齢になると、若者は、対人場面で不安を感じやすく（松原・津富 2023 : 55）、職場での関係性構築に悩むことが多い（松本 2023 : 64）と指摘している。加えて、杉原は SNS の影響によって、親密関係における会話の質が低下し、若者の共感性の発達が阻害される（杉原 2023 : 34）と主張している。

しかしながら、若者のアイデンティティ問題と人間関係問題は決して二つの独立の問題ではない。例えば、若者のアイデンティティ問題を中心にした大倉論文においても、「他者から投げかけられる言葉やまなざし、態度が、言わば鏡の役割を果たし、人間はそれらに暗黙のうちに示唆されている性質、属性等を有した『自分』なるものがあると想定するようになる」（大倉 2023 : 18）とアイデンティティと人間関係との関係性を示している。言い換えれば、人間関係が上手いかず、自分を肯定し、安心感を与える人がいなければ、アイデンティティが不安定になる可能性がある。とりわけ、若者の場合、アイデンティティを形成している途中であるため、このような問題の影響が大きいと考えられる。裏を返せば、アイデンティティ問題によって、自己表現、自己肯定できなくなる若者たちも、信頼できる人間関係を成立させるのが難しいと考えられる。つまり、現代の若者の生きづらさとして捉えられているアイデンティティ問題と人間関係問題は表裏一体だと言えるだろう。

以上、先行研究の考察から見ると、生まれ育った環境と関係なく若者に起こりやすい生きづらさは、アイデンティティ問題と人間関係問題に原因があると考えられる。さらに、このようなアイデンティティ問題と人間関係問題は相互的な関係を持っている。

2. 若者文化であるボーカロイド音楽から見た若者の生きづらさ

1) 分析対象

本稿で分析対象として扱うのは、ハチと wowaka という二人のボーカロイドプロデューサーの、ボーカロイド音楽の作品である。ボーカロイド音楽とは、初音ミクをはじめ、VOCALOID というヤマハの音声合成ソフトウェアの出現によって誕生したインターネット音楽のことを意味する。ボーカロイド音楽は、若者に人気があり、若者文化の一つとなっている。

そこで、ボーカロイド音楽を分析対象として選択した理由を、以下に説明する。

生きづらさをはじめ、若者意識に関する研究において、これまで最も適用されている研究方法は当事者インタビュー及び世論調査である。これらの方法は直接に若者の意見を収集するのに有用であるものの、欠点が二つあげられる。一つは、調査対象が地理的に又は時間的に限定される傾向があることである。例えば、世論調査の場合であれば、内閣調査をのぞくと、実施時間の制限又は地理的な原因によって、生きづらさについての若者意識を特定の時期に特定の地方に在住する大学生の語る生きづらさで代表させてしまう場合が多い。もう一つは、語られたものと当事者体験の間に差異が生じる可能性があることである。「生きづらさ」というのは、そもそも他者に打ち明けにくい主題である。従って、当事者が自分の体験について語るとき、どのように伝えるかについて深く考えなければならない。そのような深く考えたあとに決めた伝え方によって、体験の話の印象などが異なる場合がある。実際には、生きづらさについて当事者と面談する際に、多くの要素が当事者の語る話に影響を与えると指摘している研究をあげておきたい。

しかし次に、体験は意識的に「語られる」。(中略) ところでこの語られた「生きづらさ」は、すでに体験そのものからのズレを含んでいる。それは他者たちに向かって自己の体験を表現する行為の所産なのであって、聞き手との関係の違いにより、または語りという行為がなされる文脈の違いにより、条件づけられている。(田畑 2010 : 7)

以上のことから見れば、これまで行われてきた当事者インタビュー及び世論調査ではバイアスが生じる恐れがあると言える。

一方で、若者意識を研究するには、文化研究という研究方法もある。それは、文化研究を通して、その文化に属する、又はその文化を作成した人間の意識や思想を検討する方法である。例えば、日本人の考え方を研究するためには日本文化を研究対象とし、若者意識を研究するためには若者文化を研究対象とする。文化に焦点を当てる研究と言っても、文化の中にも様々な種類がある。その中で、音楽を対象とする研究が散見される。中でも注目すべき研究として、見田宗介の研究があげられる。見田は、流行歌から近代日本の民衆

の心情を考察した。なぜ流行歌を分析対象として設定したかについて、見田はいくつかの理由をあげている。それは以下の三点に要約できる。

① 書かれたドキュメントと、映画・音楽などの大衆芸術といった時代の心情の記号の中に、知的大衆の心意しか表現できないドキュメントに対比して、大衆芸術の方がより一般大衆の心情を反映している。また、「歌う」という行為は「書く」という行為より原初的であり、したがってより広汎な人々にひらかれていると同時に、日常性により多く密着している。

② 成功した大衆芸術は民衆の精神の何らかの側面に共鳴盤がないと成功できないため、その時代の民衆の中の、少なくともある一定の社会層の、ある一定の心情の側面を反映しているとみることができる。その上、「流行」であるというのは大量的表現であることを前提として、書かれたドキュメントにみられる、個人の固有の表現であるかもしれないという危険からまぬがれている。

③ 受動的に享受されるばかりの大衆芸術の他の諸様式と違って、口ずさみなど能動的に参加することによってはじめて流行歌たりうるため、流行歌の時代の民衆の支配的な情緒ないし「気分」との照応関係は、より濃密なものだといえる。（見田 2012: 7-10）

本稿は基本的に見田の論点をふまえて検証を進める。見田が日本の流行歌から日本人の心情を見出したように、本稿は現代日本の若者の間に流行した音楽から若者の心情に見られる生きづらさを検証する。

では、現代日本の若者の間に流行している音楽とはなんだろうか。流行歌は、見田が考察した明治 1 年（1868）から昭和 38（1963）年までの時期では、歌謡曲とも呼ばれ、現代の J ポップが成立するための土台であった。J ポップは、日本で最も聞かれる音楽のジャンルであり、若者の中でも人気曲が多くある。しかし、現代においては J ポップの流行度はオリコンチャート等がそうであるように主に CD 等の音楽媒体の売り上げに基づいて計算される。且つ、現代のアイドル文化によって、J ポップの CD の多くは、単に音楽の収録というより、アイドルのイメージを上げるためのマルチメディア商品だと考えられる。そのため、音楽のみならず、映像、ダンス、パフォーマンス、又は追加される各種の特典などもそこに含まれ、売り上げをあげようとしている。したがって、流行しているのは、音楽なのか、それともマルチメディアで展開される他の要素なのかは、判別しづらいのである。そのみならず、アイドルを応援するために、一人が複数枚の CD を購入する現象

もあり、曲の「流行している状態」が誇張される恐れがある。しかも、売り上げのみを基準に流行度を量れば、それはCDを購入するための財力がある若者層の間のみの流行度になる可能性もある。

他方、昨今の若者の共通点は子供の時からインターネットに馴染んできたことだと言えるだろう。最近の若者は、「インターネット世代」とも呼ばれ、インターネットによって生じた様々な発想とともに育ってきた世代である。古市憲寿によれば、「「若者」誕生に重要なのは、メディア環境の拡充である」（古市 2011:46）。その理由は、世代論における「若者」という概念は、「世代共通文化」及び「世代共通体験」がなければ成立し得ないということである。そして、若者たちに「世代共通文化」及び「世代共通体験」を与えるのは、メディアである（古市 2011:18-68）。同じ論点を現代に適用すれば、現代の若者に「世代共通文化」及び「世代共通体験」を与え、「現代の若者」という世代を成立させたのは、インターネットである。

今のインターネットの時代では、インターネット音楽も、若者の間に流行している若者文化の一つだといえよう。また、インターネット音楽は、インターネットさえあれば無料で聴けるものが多く、財力があるかどうかに関係なく、多くの若者にとって接しやすい。そして、日本における、そのような無料のインターネット音楽の典型が、ボーカロイド音楽である。

鮎川ぱてによると、ボーカロイド音楽は若者の三人に一人が聞いている（鮎川 2022:16）、若者の間に非常に人気のある音楽である。さらに、視聴者だけではなく、ボーカロイド音楽の作詞作曲者、すなわち、ボーカロイドプロデューサーの大半は、若い時からボーカロイド音楽を創作してきた。また、中村有花によれば、「ボカロ楽曲は初期こそ「〇〇（初音ミクなどボーカロイドの名前）の曲」であったが、次第に作り手の曲として親しまれていくようになった」（中村 2017:140）。すなわち、ボーカロイド音楽の早い段階では、初音ミクなどのボーカロイドキャラクターのキャラクターソングが流行していたが、そのトレンドが徐々に弱まり、ボーカロイド音楽が作詞作曲者の感情、考えなどを表すために作られるようになったのである。しかも、このような現象について、「邦楽においては歌手の名前で曲を認識するケースが多く、作曲者の名前が前面に出ることは珍しい現象であると言えるだろう」（中村 2017:141）と述べられている。言い換えれば、邦楽の中でボーカロイド音楽は、作詞作曲者の存在が大きく、作詞作曲者の意思を比較的忠実に反映しやすいジャンルである。そのようなボーカロイド音楽は現代若者の自己表現の大事な手段になっていると言っても過言ではない。

以上のことから、ボーカロイド音楽こそが現代の若者にとっての流行歌であり、若者意識の研究において検討する価値があると考えられる。

ボーカロイド音楽を代表するボーカロイドプロデューサーは多くいるが、本稿では、ハチと wowaka を対象にする。なぜなら、ハチと wowaka は、ボーカロイドプロデューサーとして人気があるだけでなく、ボーカロイド音楽の初期から活発に活動し、ボーカロイド音楽を特徴づける存在と言われているからである。

2) wowaka の作品から見た若者の生きづらさ

wowaka は、ボーカロイド音楽界においてほぼ知らない人がいない、絶大な人気を誇るボーカロイドプロデューサーである。ハチと「双璧の天才」として並び称され、デビューしてから、彼のボーカロイド曲の中では、ミリオン達成²のボーカロイド曲が8曲であり、現時点³でわずか25曲のみの「VOCALOID 神話入り」⁴というカテゴリーのうち4曲が wowaka の曲である。彼は、2009年5月に初音ミクの曲である「グレーゾーンにて。」でボーカロイドプロデューサーとしてデビューし、現実逃避 P というボーカロイドプロデューサー名も使い、主に2009年から2011年までボーカロイドプロデューサーとして活動していた。2011年にヒトリエというバンドを作り、バンドのリードボーカルとしてメジャーデビューし、2019年に31歳の若さで急性心不全によって死亡した。

wowaka の作品は、早口で高音なロックを特徴とし、これは他のボーカロイド曲にも影響をもたらし、ボーカロイド音楽の特徴になったと言われている（中村 2017 : 138）。他方、音楽のスタイルだけではなく、彼の歌詞にも特徴が見られる。それは、意味深く、人間の葛藤を表す傾向があることである。

彼のデビュー作である「グレーゾーンにて。」（作詞作曲 : wowaka、2009）から、すでにこの傾向が見える。「グレーゾーンにて。」という曲は、wowaka の現実逃避 P というボーカロイドプロデューサー名の由来にも関係がある。現実逃避 P という名前の由来については、「動画の説明文にある「現実逃避って、いいよね！」という一文から「現実逃避 P」という P 名が確定」（ノトフ 2010 : 1）したと言われている。このことからわかる通り、「グレーゾーンにて。」は、現実逃避をテーマにした曲である。それは、歌詞の冒頭からも感じられる。

道のない世界から 私を連れ出して

未知の解 解け出す 結び目 手をかけて

² ニコニコ動画での100万回再生を達成したことを示す用語。

³ 2024年10月22日。

⁴ 1000万再生を達成したボーカロイド曲に与えられるタグ。

この歌詞を考察すると、主人公は、何らかの困難に直面し、世界に自分がいける道はもうなくなったと感じ、その解決方法として現実世界から消えることを望んでいると解釈できる。この曲の背景について、「試験前の自分の気持ちそのままの歌ですw（作者コメ転載）」（初音ミク Wiki）と記述される。すなわち、ここでの主人公の抱えている問題は、学業に関連しているだろう。それ故に、次は「意味のない時代から 学ぶモノはないの」という言葉が来る。さらに以下のような主人公の孤独が感じられる歌詞が続く。

空想の世界で君と触れたり！混ざり合ったり！
私のいない今日は楽しいでしょ？

クラスメイトの「お隣さん」と別れ、空想の世界に逃れても、まだ現実のすべてを切り離すことができず、現実にいる隣席の「君」と「触れたり混ざり合ったり」することを想像する。しかし、そこから現実に連れ戻され、「私のいない今日は楽しいでしょ？」と他人の世界における自分の存在感について考えてしまう。「私のいない今日は楽しいでしょ？」という歌詞から、自分がいない世界であれば、他者がより楽しく過ごせるという自己否定感と孤独感が読み取れる。

歌詞の後半の部分で、主人公は逃げていることを後悔する。それは以下の歌詞に表れている。

朝露に塗れた私は独りきり
言葉を失って 夕焼けに拗ねている
月明かりに眠る街の絵 描いてる
私の右手には無数の後悔だけ

しかし、後悔しても、逃げることをやめるわけではない。最後に、すべてを放棄し、逃げたいと言う気持ちが強くなるだけである。曲の最後の部分に、「逃げだそよ今すぐに 良いじゃない！／泣き出す独りの夜、良いじゃない。／さあ 現実を見なくても良い世界／悲しさ一つずつ集めて」という現実世界との決別を告げる。この曲では、学ぶことが嫌いで、意味がないと感じる人の心情が描かれるが、それだけではなく、人生の行き詰まりと孤独感もそこから感じられる。

「グレーゾーンにて。」に見られる孤独感と現実逃避主義は、wowakaの曲のなかで最も人気がある、ミリオン達成の各曲にも継続されてきた。

例えば、「ローリングール」（作詞作曲：wowaka、2010）である。「ローリングール」と

いうタイトルには、二つの意味が考察される。一つは、そのまま「rolling girl」（転がっている少女）という意味で、歌詞にも見られるように、いつも頑張っている少女を視覚的に例えた表現である。もう一つは、歌詞の第一行目である「ロンリーガールはいつまでも届かない夢を見て」に見られるように、「ローリングガール」の文字の順序を入れ替えることで「ロンリーガール」にし、「lonely girl」（孤独な少女）を示唆している。このような言葉遊びによって、どれほど頑張っても孤独のままでいる少女のイメージを、冒頭から視聴者に想像させるものと考えられる。歌詞では、「届かない」という言葉が何度も繰り返される。その言葉には、「ローリングガールの成れの果て 届かない、向こうの色」に示されるように、世界から隔絶された孤独感がこめられている。「ローリングガール」は、「グレーゾーンにて。」の主人公とは対照的に、現実逃避するのではなく、「ロンリーガールはいつまでも 届かない夢見て 騒ぐ頭の中を掻き回して、掻き回して。」という歌詞に読み取れるように「届かない夢」を果たすために非常に努力する少女である。しかし、彼女を迎えるのは残酷な結末である。全力を尽くし、何度も失敗を繰り返し、それでもまだ夢に届かず、最後は「息を止めるの、今。」というまるで自分の手で自分の命を終えることを描くような言葉が綴られる。とりわけ、「息を止める」という言葉は全体で三回も繰り返されるものの、最後の一回で「とめる」ではなく、「やめる」と歌われている。これは、少女の精神的な限界と無力感を表すと言える。この曲で現実逃避主義は明確には描かれない。しかし、このような曲の結末から見れば、wowakaの音楽における現実逃避とは、個人の選択ではなく、追い詰められた人間が行かざるを得ない唯一の道である。

他方、その直後にリリースされた、wowakaの最も再生回数が多い曲である「ワールズエンド・ダンスホール」（作詞作曲：wowaka、2010）では、現実逃避主義がより明確に描かれる。この曲は、「冗談混じりの境界線上」で踊る二人の姿を描く。「祭壇の上で踊るの？」という歌詞から見ると、この「境界線」は、生と死との境界線、又は現実と非現実との境界線であろう。さらに、「階段のそのまた向こう 全然良いこともないし、ねえ」という歌詞は、wowakaの他の曲でも見られる、現実世界への嫌悪を表す。現実世界への嫌悪の理由については、「短い言葉で繋がる意味を／顔も合わせずに毛嫌う理由を／さがしても さがしても／見つからないけど／はにかみながら怒ったって／目を伏せながら笑ったって／そんなの、どうせ、つまらないわ！」との言葉からわかるように、他人から悪口を言われ、嫌われているが、なぜか知らずに、自分の本当の気分を隠すために涼しい顔を装わないといけないことにうんざりするからである。そのため、「祭壇の上で踊る」というまるで正気を手放すような行為にふけり、現実から逃げる。他方、この曲における「踊り」は、もう一つの意味がある。それは、「つまらん動き繰り返す意味を／音に合わせて足を踏む理由を／さがしても さがしても／見つからないから」という歌詞に表れている。この歌詞にお

ける「音に合わせて足を踏む」という表現は、踊りの動作を描写しているだけでなく、他者が決めた常識に従って行動することも象徴していると考えられる。そして、「音に合わせて足を踏む理由を／さがしても さがしても／見つからない」が示すように、常識との齟齬に苦しんだ末に、命を終える選択をしたのである。「さよなら、お元気で。／終わる世界に言う———」という最後の部分には、終わりを受け入れる姿勢が見られる。このような人生、又は、現実の世界への別れから、自殺の暗示、又は現実逃避主義が窺われる。

ここで、wowaka の特色のある音楽スタイルについてもう少し触れたい。wowaka の音楽スタイルは、実は以上に述べたような彼の特色のある歌詞の内容と密着していると考えられる。wowaka の曲には、長い歌詞を早口で詰め込んだ速いテンポの曲をミク特有の高音で歌い上げるものが多いのである。wowaka の曲における高い声は、しばしば甲高い絶望の叫びを連想させる。また、早口の長い歌詞は、様々な感情や考えに同時に襲われることによって混乱していることを描くのに使用されると推測される。このように考えると、wowaka の音楽は、精神が不安定な状態にある人間の内心を再現するのに成功していると言える。

3) ハチの作品から見た若者の生きづらさ

ハチは、wowaka と同様に、ボーカロイド音楽の特徴である早口の高音ロックというトレンドの先駆けとなったボーカロイドプロデューサーである（中村 2017:138）。ハチは主に 2009 年から 2011 年までボーカロイドプロデューサーとして活動していた。彼がリリースしたボーカロイド曲の中で、3 曲が「VOCALOID 神話入り」というカテゴリーに入っている。2012 年に、彼は本名の米津玄師名義でシンガーソングライターとしてソロデビューした。2018 年にリリースされたシングル「Lemon」によって、人気が発達した。ソロシンガーソングライターとして現時点まで活躍している。メジャーデビューしてからも、いまだに公式の YouTube チャンネルにボーカロイド関係のものをアップロードしている。

ハチの歌詞の特徴として、一見すると意味不明な歌詞が多いことがあげられる。また、彼の音楽には、普通の歌声以外、吐くような声や途切れたノイズなど風変わりな音が入り混じっている。さらに、wowaka のように、叫ぶような高い声も彼の曲では常に使われる。このような意味不明な歌詞と不穏な音楽の性質を組み合わせるのは、非現実の雰囲気を作り上げ、精神不安定の状態を連想させるためだと考えられる。

一見わかりづらい歌詞だが、曲の MV などと組み合わせて見ると、意味が見えてくる。ハチの人気を集めている音楽では、まず、ディストピアをテーマとした曲が多い。その例として、「結ンデ開イテ羅刹ト骸」（作詞作曲：ハチ、2009）、「Mrs.Pumpkin の滑稽な夢」（作詞作曲：ハチ、2009）及び「パンダヒーロー」（作詞作曲：ハチ、2011）などがあげられる。これらの曲では、上に言及したように、意味不明な歌詞及び不安な雰囲気を引き

立てた音楽、また、「結ンデ開イテ羅刹ト骸」における羅刹、骸、地獄、「Mrs.Pumpkin の滑稽な夢」における喋るパンプキンや動物などグロテスクなイメージ、又は「パンダヒーロー」における廃墟の町やオピウム、「売女」などの社会の暗黒面を反映するものを登場させ、明確にディストピアの世界観を描く。このようなディストピアの世界観は、しばしば現実世界にある悪い面を拡大鏡で見せて強調し、批判するためのものである。例えば、「結ンデ開イテ羅刹ト骸」では、「下賤な蟒蛇墓前で逝く／集り出す親族争い／「生前彼ト約束シタゾ」／嘯も死人に口は無し」という死人の墓前で家族が争い、嘘をついて死人を利用し利益を図ろうとする光景が描かれていることから、人間の薄情さや社会の残酷さに対する批判の姿勢が読み取れる。ほかに、同曲で「子作りしようか」や「次々と売られる可愛子ちゃん」などといった売春を連想させる要素があり、それを羅刹と骸など地獄のシーンの中に置き、売春に陥る少女たちの人生はまるで地獄のようなものと印象づけられる。

しかし、同時に、逃げようのないディストピアも行き詰まりの状態であり、トラウマなど作詞作曲者自身の中にある、出口のない乱雑なネガティブな感情の象徴だと推測される。例えば、「マトリョシカ」（作詞作曲：ハチ、2010）である。ここで真っ先に注目したいのは、MV のハチ自身が描いた風変わりな違和感を呼び起こす画像と「きっと私はいつでもそう／継ぎ接ぎ狂ったマトリョシカ」という言葉である。MV に登場する GUMI とミクの顔は、初めから終わりまで大きく開かれた虚ろな目と不気味な笑顔が特徴的で、不自然な表情という印象を与えている。さらに、MV の 2 分 22 秒から始まるシーンでは、二人の顔が笑顔の絵文字のようなものに隠され、その笑顔が実際に本当の気持ちを隠すための仮面にすぎないということが示唆される（ハチ 2010）。このような画像は、曲全体に不安定な雰囲気を与え、精神的な問題を連想させる。曲の主題である「継ぎ接ぎ狂ったマトリョシカ」も、不安定な精神状態の象徴だと考えられる。具体的には、「継ぎ接ぎ狂ったマトリョシカ」とは、何度も壊れ、継ぎ合わせられた心、あるいは精神を表すものと捉えられる。但し、それだけではない。その次の歌詞を見れば、「継ぎ接ぎ狂った」というのは、他人との繋がりを欲しすぎて強く求めることをも示していることが解る。具体的には、「マトリョシカ」の歌詞に、「あなたと私でランデブー？ランデブー？ほらランデブー？／あらま飛んでったアバンチュール？／足取り歪んで 1,2,1,2」という二人の狂ったような踊りという行為が繰り返される。最後の部分に、「酔い潰せ 歌い出せ」との言葉が現れ、曲中で何度も描かれる踊りの描写と結びつくことで、男女が共に酒を飲み、歌い、踊る様子が描かれている。これにより、婚活ダンスパーティーやホストクラブ、さらにはそれらと結び付けられる男女の表面的な肉体関係が連想される。そして、その直後に再び「今日もほら 継ぎ接ぎ狂ったマトリョシカ」と曲の最初の部分と繋がることによって、主人公が他人と必死に繋がっても、それは表面的な関係にすぎないから結局壊れているままだということが示

される。その上、「待ってなんて言って待って待って／たった一人になる前に」というのも、人と繋がれない恐怖を表す。また、単に人と繋がりたいだけでなく、「私の全部受け止めて／ああ、その両手で／受け止めて」という歌詞から推測できるように、自分のすべてを受け入れる人と繋がりたいとの気持ちが感じられる。つまり、自分のことを理解する人がいないことによって孤独感を感じ、人との繋がりを強く求め、しかし、求めるほど深い孤独感に陥って心も精神も壊れていくということであろう。ちなみに、ミリオン達成のハチの曲の中で、他に同じ孤独感をテーマとした曲には「clock lock works」（作詞作曲：ハチ、2010）などもある。

他方、「ドーナツホール」（作詞作曲：ハチ、2013）は、アイデンティティの不安定の問題についての曲として捉えられている。この曲は、一見したところ、大事な人を失ったことについての曲だと思われがちだが、実際に失った大事な人は、「自分」であり、アイデンティティの喪失感と繋がるという解釈が多数見られる（MarSali 2021）（スピタメウォッチング 2021）。タイトルの「ドーナツホール」は、自分の中にある空白の象徴である。「いつからこんなに大きな／思い出せない記憶があったか／どうにも憶えてないのを／ひとつ確かに憶えてるんだな」で表される通り、このような空白は、自分がずっと探しても見つけれないものである。探している空白の記憶には、「あなた」という別の人物の存在があるものの、その人物は、必ずしも他の誰かではなく、「自分自身」の一部とも解釈できるだろう。なぜかという、MVを見ればわかるだろう。MVでは、GUMI、ミク、ルカとリンという4人のキャラクターが一人ひとり登場し、一緒に出るシーンは一切なく、キャラクターの間につながりも見えない。それに、キャラクターの4人は、まるで互いをコピー（複製）する如く全く同じ表情とポーズで順次に出現するシーンがいくつかある。そのため、この4人のキャラクターは、一つの物語の中の互いにつながりがあるキャラクターたちではなく、別々に個人の物語の中にいる主人公のように見える。そして、この主人公たちの共通点は、「ドーナツホール」、すなわち、空白があることである。したがって、「ドーナツホール」は、様々な形をしている、人それぞれの中の失われたもの、空白になった部分を象徴的に表現しているのではないかと推測される。このような空白があるからこそ、「それでも僕は虚しくて／心が千切れそうだ どうしようもないまんま」というアイデンティティ喪失感が生じ、以下の歌詞に読み取れるように、自分が完成していないがゆえに、それを埋めるためのものを必死に探している。

死なない想いがあるとするなら
それで僕らは安心なのか
過ぎたことは望まないから

確かに埋まる形をくれよ

同じ歌詞から、主人公は「死なない想い」などなく、「過ぎたこと」はもう戻らないという事実を深く理解しているということが了解される。だからこそ、自分の中のドーナツホールを埋めようとしても完全に埋まることはなく、主人公は行き詰まり、苦しんでいる。曲の最後には、アイデンティティの喪失感に対する解決が見出され、希望に満ちたエンディングが描かれている。最後に、「目を見開いた 目を見開いた／あなたの名前は」のところで、自分にとっての最も大事なことを思い出し、悟りを得て、不完全な自分と向き合うことになると考えられる。この曲は、2013年にリリースされた曲だが、2024年9月にGODIVAとの共同で新しいMVが米津玄師ことハチの公式Youtubeチャンネルにアップロードされた。加えて、MVの概要欄に、最初のバージョンにはなかった曲の主題のようなものが追加された。それは「壊れていても構いません」という一文だ。「壊れていても構いません」というのは、自分の歪んだ部分も大事にするというメッセージを含み、以上の解釈と一致すると考えられる。

4) ボーカロイド音楽から見た若者の生きづらさの特徴

以上、wowakaとハチのボーカロイド音楽を検討した。

まず、二人の特徴的な音楽スタイルである早口のロックは、彼らが多くの曲で伝えようとする内容である生きづらさと関係があると考えられる。

また、彼らの生きづらさをテーマとした曲に真っ先に見られたのは、孤独感と他人の薄情さへの嫌悪である。つまり、人間関係問題である。しかし、ここでも、人間関係問題がアイデンティティ問題と密着していることが考察される。具体的には、「マトリョシカ」において、自分の存在感が肯定されないため、主人公は孤独感に襲われ、消極的意識を増長させて他人とのつながりを強く求めた。その結果さらに孤独感に陥ったように、自分のアイデンティティ、存在感に意味がないと感じると、健全な他人との関係を結ぶのが難しくなる。その逆もまた正しいと言える。

例えば、「ドーナツホール」に関する話である。ハチは、初アルバムの時のインタビューで、自分が「他人とコミュニケーションをうまくとれない人間」であり、「今って人間関係が希薄になっている時代」だと言及した（ふくりゅう 2012）。さらに、その後のインタビューにおいて、彼は「トラウマや環境による偏屈な物の考え方」などといった「コミュニケーション能力があって、ちゃんとポジティブシンキングができて、目的に向かって努力することができる」ような人間には感じ取ることのできない「呪い」のようなものを感じていると述べている（柴 2014）。その上、それは、「ドーナツホール」にある「胸に空いた

埋められない穴」というイメージを通して表されるとする（柴 2014）。米津玄師の「呪い」は、希薄な人間関係によるものとすれば、ハチの曲に見られるアイデンティティ喪失感も、人間関係の問題に原因があるといえるであろう。

ここで注目したいのは、分析した曲の大半は、バッドエンドに終わることである。wowakaの曲では、現実逃避主義や自殺の暗示などが見られる一方、ハチの曲では、主人公が精神不安定な状態で永遠に踊り続ける。「ドーナツホール」のような、最後にささやかな希望のようなものを見せられる曲は、実際にハチが米津玄師としてメジャーデビューしてから登場し始めた。これらのバッドエンドは、彼らが感じていた逃げようのない苦しみを表現しているといえよう。

また、これらの曲にはもう一つの共通点が見られる。それは、「内向き」という傾向である。生きづらさを感じる時の反応として、二つの行き方がある。一つは、誰にも打ち明けず、自分のことを責め、現実逃避を選ぶことである。もう一つは、嫌悪感を社会に向け、社会を批判し、変えようとする事である。そして、後者のほうが、生きづらさを緩和させるためにはより効果的である。その証拠として、雨宮処凛のケースがあげられる。彼女が生きづらさを勝ち抜き、生きる意味を見つけたことについて、田畑稔は「彼女の脱皮過程で決定的だったのは、攻撃を自分から社会へ向けはじめたことである」（田畑 2010：8）と記述した。しかし、本稿で検討したボーカロイド音楽から見れば、現実逃避という「内向き」の傾向が強い。社会批判というものがあっても、結末は何も変わらずに、変えようというメッセージも全くない。希望がない未来、変えられない苦しい毎日というのは、まるで若者の避けられない現実のように描かれている。

まとめと今後の課題

現代社会では、最も典型的な若者の生きづらさは、人間関係問題とアイデンティティ問題を背景に考える、生きづらさである。本稿では、ハチと wowaka というボーカロイドプロデューサーの作品の分析を通して、若者文化であるボーカロイド音楽において、そのような典型的な生きづらさがしっかりと描かれていることを検証した。また、ボーカロイド音楽の分析から、若者の生きづらさを悪化させる要素は「内向き」の傾向であり、さらに、彼らは未来に、社会に希望がないということも明らかになった。

ボーカロイド音楽には、他にも生きづらさについて触れる曲が多くある。より多くの曲を分析すれば、生きづらさと関係がある若者意識についてより新しい発見があると推測される。今後、2012年以降に活躍している他のボーカロイドプロデューサーによるボーカロイド音楽を分析し、若者文化に見られる現代日本の若者の生きづらさの感覚とその進化をより詳細に検討していきたい。

参考文献一覧

- 「グレーゾーンにて。」、初音ミク Wiki（最終変更 2024 年 3 月 12 日）、<https://w.atwiki.jp/hmiku/pages/5268.html>（2024 年 10 月 22 日閲覧）。
- MarSali、「「ドーナツホール」は失恋の曲じゃない？ハチこと米津玄師が届ける欠落感を描いた歌詞の意味を考察」、UtaTen（公開日 2021 年 11 月 5 日）、<https://utaten.com/specialArticle/index/6958>（2024 年 10 月 24 日閲覧）。
- 鮎川ぱて、2022、『東京大学「ボーカロイド音楽論」講義』、文藝春秋。
- 石垣琢磨、2023、「序論としてのエッセイ」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：1-11。
- 大倉得史、2023、「心理学では現代の青年期をどのように理解しているか」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：14-21。
- 厚生労働省「自殺の現状（令和 4 年版）」、2023、<https://www.mhlw.go.jp/content/R4kakutei01.pdf>（2024 年 10 月 15 日閲覧）。
- 柴那典「米津玄師 “呪い”を解く鍵「YANKEE」に込めた思い」、音楽ナタリー（公開日 2014 年 4 月 23 日）、<https://natalie.mu/music/pp/yonezukenshi04>（2024 年 10 月 24 日閲覧）。
- スピタメウォッチング、「【米津玄師】「ドーナツホール」歌詞の意味&解釈 失恋の曲と見せかけて？！アイデンティティに関わる謎...」、livedoor Blog（公開日 2021 年 3 月 2 日）、<http://blog.livedoor.jp/spitame/archives/38711599.html>（2024 年 10 月 24 日閲覧）。
- 杉原保史、2023、「SNS がもたらす若者の生きづらさ」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：30-38。
- 杉山春、2019、「語られてこなかった死：自死とは（第 23 回）恵まれた環境にいて思われる若者の生きづらさ」『ヒューマンライツ』374：34-37。
- 高石恭子、2023、「学生相談担当者が捉えた今を生きる若者の「生きづらさ」」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：22-29。
- 田畑稔、2010、「若者の「生きづらさ」へのアプローチ」『人間科学研究』4：5-21。
- 中村有花、2017、「ボーカロイドブームの推移とその理論的考察：声の性質・ブームの傾向・作者の立ち位置を中心に」『文化学研究』26：131-145。
- ノトフ、「バンドとニコ動、2 つの顔を持つ「裏表ラバーズ」作者の素性」、ASCII.jp デジタル（公開日 2010 年 2 月 13 日）、<https://ascii.jp/eleme/000/000/497/497898/>（2025 年 2 月 8 日閲覧）。
- ハチ、「【オリジナル曲 PV】マトリョシカ【初音ミク・GUMI】」[動画]、ニコニコ動画（公開日 2010 年 8 月 19 日）、<https://www.nicovideo.jp/watch/sm11809611>（2025 年 2

月 8 日閲覧)。

ふくりゅう、「米津玄師：「ハチ」から本名へ 自分を描き切った「diorama」、音楽ナタリー（公開日 2012 年 5 月 16 日）、<https://natalie.mu/music/pp/yonezukenshi>（2024 年 10 月 24 日閲覧）。

藤川奈月、2021、「「生きづらさ」を論じる前に：「生きづらさ」という言葉の日常語的系譜」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』138：359-374。

古市憲寿、2011『絶望の国の幸福な若者たち』、講談社。

松原弘泰・津富宏、2023、「伴走する就労支援」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：52-60。

松本桂樹、2023、「企業における若年層の適応問題」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：61-67。

見田宗介、2012、『定本 見田宗介著作集 第IV巻 近代日本の心情の歴史』、岩波書店。

山下美紀、2020、「若者たちの生きづらさ—『朝日中高生新聞』投書記事と回答の語りから—」『ノートルダム清心女子大学紀要』44（1）：131-144。

渡邊慶一郎、2023、「〈コラム〉精神科医からみた今の若者たち」『こころの科学』2023 年増刊号「若者たちの生きづらさ」：157-160。

Abstract

Identity Issues, Interpersonal Relationship Challenges, and the Feeling of Helplessness Among Modern Japanese Youth: An Analysis of Vocaloid Producers Hachi and Wowaka

Pham Quynh Lien

Ikidurasa, translated as “the pain of living,” is a significant issue in modern Japanese society, with youth being among the most vulnerable. To address this problem, it is essential to investigate the thoughts and emotions of young people burdened by *ikidurasa* and identify its underlying causes.

This study adopts a twofold approach. First, it reviews previous research to examine the documented causes of *ikidurasa* in contemporary society. Second, it analyzes the lyrics of Vocaloid songs by renowned producers Hachi and Wowaka to explore youth perspectives and emotions conveyed through music.

Findings indicate that *ikidurasa* primarily stems from identity crises and disconnection in human relationships. Furthermore, modern Japanese youth tend to internalize their suffering, refraining from outward expression—likely due to a loss of hope in society and the future—making *ikidurasa* even more difficult to address.